

『ミダラなアナタ』

著：ふゆの仁子

ill：みなみ遥

ぎしりと音を立てて、正親が立ち上がる。彼はローテーブルの横を通り、呆然自失の壮介の前にやってくる。

「俺、男です」

「もちろん、最初のときからわかってる。男じゃなければ、興味なんて持たなかった」

笑いながら正親は壮介の横に腰を下ろす。艶(なまめ)かしい表情で体を寄せ、手がするりと襟元に伸びてくる。

「きっちりネクタイが結んであるけれど、自分でやったんじゃないでしょう？」

「え？」

なんでわかるのだろうかという短い声を上げると「当たった」と正親は笑った。

「誰が結んでくれた？ ママ？ それとも、恋人？」

斜め三十度に傾けられた頭。僅かに上目遣いになる瞳。さりげなく、でも意図的に外された、シャツの第一ボタン。俯くと、細い首筋が視界に飛び込んでくる。

どうすれば、自分が一番綺麗に見えるか、正親はよく理解しているのだろう。

これまでに見てきたどんな女性よりも白く細い。かぶりつきたい衝動に、自分自身で、吸血鬼ではあるまいと突っ込みを入れてみる。だが、視線をそこから離せない。

「モデル友達が……」

「ふーん。女？」

肩口に頭を押しつけた正親は意地悪な笑みを浮かべた。

「男です」

「そっか。綺麗に結べてるけど、妬(や)けるから、ほどこいちゃおう」

結び目に指を突っ込んで、言葉の通りにネクタイを外してしまう。

「正親さん？」

「上着も窮屈だよね。部屋に入ってすぐに脱いでもよかったのに」

両肩に前から手を差し入れて、慣れた手つきで壮介の上着を肘の辺りまで下ろしていく。

「緊張してるね」

さりげない微笑みでさえ、強烈な誘惑だった。

何をされているかを理解する前に引き摺り込まれそうな艶だ。

正親はあくまで笑顔のまま壮介の胸元に鼻を寄せる。

「君の匂いは、汗と、太陽と、アクア・ディ・ジオの香りだ」

「コロンの匂いまでわかるんですか？」

至近距離にある男の顔に動(どう)悸(き)が早くなる。

「わかるよ。君について、わかる限りは調べたと言っただろう？」

俯く壮介の視線と、見上げた正親の視線が絡み合う。

その刹那、正親は微かに唇を開けてみせる。

そこから覗くのは、淡い唇の色とは違い、毒々しいまでの赤色の舌だ。歯の間を行

き来し、自分の唇を思わせぶりに嘗め上げる。

「壮介……ぼくは君が好きだよ」

甘い告白のあとで、正親の手はゆっくりと壮介の足の間に伸びてくる。指先で太(ふと)腿(もも)を撫(な)でながら、正親を見ているだけで反応を始める情けないそこにまで近づいた。

「これを、どうしたい？」

軽く伸び上がるようにして、正親は壮介の耳元に口を添える。ぴちゃりという音のあとで、生温かくてねっとりとした感覚が耳を嘗め上げていく。

「あ……」

「感じる？」

耳元での含み笑いによって生まれる感覚が、背筋を走り抜ける。言葉にならない。「ぼくは、どっちでもいい。壮介の好きなようにしてくれて構わない」

耳(じ)朶(だ)に歯が立てられる。ぞくぞくと続け様に生まれる快感に、壮介は必死で両目を閉じた。

「ぼくは君に、最高の天国を見せてあげられる」

もう、駄目だ。

白旗を揚げるぎりぎり、壮介は不意に父親の言葉を思い出す。

『君ならきっと、彼の意見に振り回されることなく自分の意志で、なんらかの術を見つけてくれると思っている』

自分を信頼してくれている義父。彼の期待を裏切りたくない。正親の肩に手を置き、自分の体から引き剥(は)がした。

「——やめて、くださいっ！」

消え入りそうな理性を懸命に呼び覚まし、壮介は俯いたまま、必死に訴える。

「どうして？ したくない？」

それでも正親はまだ誘惑の手を休めようとはしない。甘い声に堪(た)えられず、椅子から立ち上がり、触れてこようとする手を振り払った。

「やめろっ！」

「壮介？」

とうとう堪えきれずに怒鳴る壮介の顔を、正親は信じられないという表情で見つめている。

壮介は肩で荒い息をしながら、やっと強烈な色香を放つベールを脱いだ正親の顔を真正面から見つめる。

「俺の、ことを、知らない、と、デザインができないという気持ちは、わかります」

興奮状態は簡単にはおさまってくれないが、それでもなんとか言葉を紡いでいく。

「でもだからって、今みたいなことを、しないでください」

「どうして？」

正親は本気で聞いてきている。

「今、その気になってただろう？ 今だってまだ、平静を装ったところで、前かがみになっているのにぼくが気づかないとでも思ってるのか？」

言いにくいことをはっきり言ってくる。しかし、そこで壮介も負けていられなかった。

「——俺は、ゲイが嫌いなんです」

「信じるわけないだろう、そんな言葉。大体、嫌い嫌いも好きのうち。嫌いだったら、な

んでぼくが迫って股間膨(ふくらませてるんだ？ ぼくが納得いくように説明してみろよ」

「それは……」

綺麗な顔から告げられるきわどい単語に、壮介のほうがちかちかする。

頬が熱くなるのを自覚しながら、壮介は正親の顔を見つめる。初対面にも拘らず、壮介が上辺だけでその言葉を繰り返しているのを、あっさり見破られてしまう。ゲイが嫌いなのではなく、ゲイであるJKDが嫌いだけなのだ。

「——正親さんが綺麗だから」

悔しいけれども、正直なところを明かす。

「ぼくは男だよ？」

「でも、綺麗だったから、迫られて、ドキドキしたんです。悪いですか」

これは事実だ。今度は壮介が開き直る。開き直るというよりも自(や)棄(け)になっているというのが正しい。

本文 p74～80 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>